

キャンプ経験が児童の Locus of Control と 一般性自己効力に及ぼす影響

関 根 章 文

The effect of camp experience upon the locus of control and general self-efficacy of school children

SEKINE Akifumi

The purpose of this study was to examine the effect of camp experience upon the locus of control and general self-efficacy in elementary school children who participated in a 7-day camp conducted in 1990. Subjects were 48 camp participants and 42 comparative children from 5th to 6th graders.

The following results were obtained :

1. The camp participants showed significantly greater change to internality in locus of control than comparative children between one month before and one month after camp.
2. Both Locus of Control for Children (LOCC) scores and General Self-Efficacy Scale for Children (GSESC) scores were significantly correlated with three times : one month before, immediately after, and one month after camp.
3. Internal group of locus of control in one month before camp showed significantly higher general self-efficacy than external group, particularly in the category of Anxiety about Failures and Behavioral Activeness.

Key words : Camp, Locus of control, General self-efficacy

はじめに

キャンプは活動と生活が自然と強くむすびついている総合的活動であり、多くの教育的効果が含まれている。Van der Smissen¹⁸⁾ はキャンプの目的として、1) 個人と環境の関係である自然環境の中での活動と理解、2) 個人と他者との関係である社会的行動、3) 個人と自分自身との関係である自己の発達を挙げている。キャンプの研究でも、この目的に沿ったものが行われている。個人と自分自身との関係に関する研究としては、キャンプ経験による自己概念の向上が数多く報告されており、最近では Locus of Control が主要な従属変数となっている⁷⁾。

Locus of Control は Rotter¹³⁾ の唱えた社会的学習理論である。個人があるできごとを自分の行

動に随伴しており、しかも自分自身の永続的な特性に随伴していると知覚する場合を Internal Control と呼ぶ。反対に、自分の行動に随伴しているわけではないと知覚した場合や、幸運・偶然・不運の結果や力のある他者の統制下にあるためとみなしたり、とりまく要因が非常に複雑で予測不可能であると知覚した場合を External Control とよぶ。Locus of Control は、個人が過去の経験を基にして発展させてきた「ものの見方」という意味で、個々の状況を超えた人格変数のひとつと考えられ、人の行動を予測する上で重要な変数といえる。

キャンプ経験と Locus of Control についての検討として、キャンプ後に Internal 方向へ変容した結果が報告されている^{10,12,16,19)}。

Bandura の提唱した自己効力 (Self-Efficacy) 理論は適切な行動をうまくできるかどうかという個人的な確信であり、自己効力を高く認知すると、積極的に課題に取り組み、葛藤的な状況に長期的に耐えることができるという行動特徴がある。したがって、自己効力を個人がどの程度身につけているかを認知することが、その個人行動を予測する要因と解釈されている。自己効力は主に特定の状況における信念としているが、個人の成就経験はその特定の行動だけでなく他の行動にも般化し影響を及ぼすと、Bandura は一般性についても特別に述べている¹⁻³⁾。また坂野・東條¹⁴⁾は、一般性自己効力の高さとは、個人がさまざまな場面において、自己の行動の遂行可能性についてどのような見通しを持って行動を生起させているかの目安となる変数であると定義している。

飯田・関根⁶⁾はこの一般性自己効力に着目し、キャンプ経験が児童の一般性自己効力の向上に影響を与えることを報告している。

ところで Saltzer¹⁵⁾は、効力予期に対する結果予期と同じ要素として Locus of Control と Learned Helplessness を挙げて、Locus of Control と自己効力の関係を示唆している。同じく竹網・鎌原・沢崎¹⁷⁾は、自己効力に関する研究をレビューした結果、特定の場面における自己効力と Locus of Control の間に相関はなく、自己効力の対象が一般的であり、Locus of Control と同じ水準ならばある程度相関があると報告している。

キャンプ場面で Locus of Control と一般性自己効力を同時に変数として扱った Wright²⁰⁾は Self-Empowerment を独自に定義している。つまり Locus of Control が Internals で一般性自己効力が高ければ、結果は自分の行動に随伴し、その行動を達成できる能力があると信じることになる。そして自分の目的を達成するために、問題のある状況でも克服するであろうという仮説をもとに定義している。彼はこの理論に基づいて、非行少年に対する Outward Bound Program の効果を測定している。その結果、プログラムの前後で比較して Locus of Control と一般性自己効力が有意に向上したことを報告している。わが国では、キャンプ場面における Locus of Control と一般性自己効力に関する研究は端緒についたばかりである。

本研究では、キャンプに参加した小学校高学年

児童を対象に、次の研究課題を設定した。

- 1) キャンプ経験が参加児童の Locus of Control に及ぼす影響を検証する。
- 2) Locus of Control と一般性自己効力の関係について検証する。

方法

1. 被験者

1990年8月に幼少年キャンプ研究会が主催したキャンプの参加者、小学校5・6年生48名を実験群(キャンパー)とした。また対照群(非キャンパー)はキャンパーの友人42名で、キャンパーと同一の学校、学年、性別のもので構成されている。学年、性別の内訳は表1の通りである。

表1 被験者内訳

	実験群(キャンパー)			対照群(非キャンパー)		
	男子	女子	合計	男子	女子	合計
5年	23	6	29	20	6	26
6年	9	10	19	9	7	16
合計	32	16	48	29	13	42

(単位:名)

2. キャンプの概要

キャンプは6泊7日の日程で、宮城県栗原郡花山村にある同研究会所有の花山キャンプ場で実施された。キャンプ生活は、テントで寝袋を使用して宿泊し、自炊による原始的キャンプの形式で行われた。大学教官、医師、大学院生を含む14名のスタッフがキャンプの指導と運営にあたった。

キャンパーは1班が6名もしくは7名からなる男女学年混合のグループ7班に分けられ、各班にカウンセラーを1名づつ配置した。

キャンプでの主要な活動は、テントサイトの設営・撤収・仲間づくりゲーム(ASE)、沢登りとテント泊を含む1泊2日の登山、個人別自由活動、クラフト、キャンプファイヤーで構成されている。

3. 検査および手続き

- 1) 児童用一般的 LOC 尺度 (Locus of Control for Children)

鎌原・樋口・清水⁹⁾が開発した成人用一般的

LOC 尺度をもとに修正し、「児童用一般的 LOC 尺度 (Locus of Control for Children, 以下 LOCC と略記する)」を作成した。質問項目の表現を小学校高学年児童が理解できるよう平易な文章にした。LOCC は16の項目から成っており、各項目への解答は「とてもそう思う」から「まったくそう思わない」の5件法で行った。得点の可能な分布範囲は16~90で、得点が高い程 Internal 傾向が強いことを示す。

小学校5・6年生75名を対象に、キャンプ前の6月と7月の2回予備調査を行った。項目毎の分布を調べた結果、分布に偏りがあったため、1点と2点の両方を1点として、3点を2点、4点を3点、そして5点を4点と再得点化して LOCC 得点を求めた。したがって、得点の可能な分布範囲は16~64となった。平均は42.68、標準偏差は6.93であった。

検査・再検査間の相関係数は、 $r = .74$ で高いものであった ($p < .001$)。これは、鎌原ら⁹⁾が成人を対象に行った結果 ($r = .76$) とほぼ同じ値を示している。

次に LOCC を各8項目からなる部分テストに分割し、信頼度係数を算出した。その結果、信頼度係数は $r = .70$ という値であった。さらにクーダー・リチャードソンの第20公式にしたがって信頼度係数を算出した結果、 $r = .73$ という値を示した。

以上の結果から、検査・再検査間の相関係数と2つの信頼度係数の値をみると、LOCC は高い信頼性を持っていることがわかる。

2) 児童用一般性セルフ・エフィカシー尺度 (General Self-Efficacy Scale for Children)

坂野・東條¹⁴⁾が成人用に開発した16項目2件法の一般性セルフ・エフィカシー尺度 (General Self-Efficacy Scale) をもとに、飯田・関根⁶⁾が児童用に修正した児童用一般性セルフ・エフィカシー尺度 (General Self-Efficacy Scale for Children, 以下 GSESC と略記する) を使用した。15項目5件法で、得点可能範囲は15~75で、得点が高い程一般性自己効力が強いことを示す。

LOCC と GSESC の調査は、キャンパーにはキャンプ1ヶ月前 (Pre)、直後 (Post 1)、そしてキャンプ1ヶ月後 (Post 2) の3回、非参加者にはキャンプ1ヶ月前と1ヶ月後の2回、郵送調査法によって実施した。ただし、キャンパーのキャ

ンプ直後 (Post 1) については、キャンプ場で集合調査法により行った。

結果と考察

1. キャンプ経験による Locus of Control への効果

キャンプ経験の Locus of Control への影響をみるために、日常生活時であるキャンプ前後1ヶ月 (Pre と Post 2) の LOCC 得点の平均について、 t 検定を用いて実験群と対照群を比較した。その結果表2に示す通り、Pre と Post 2 ともに有意差がみられた (Pre : $t = 2.19$, $df = 88$, $p < .05$, Post 2 : $t = 3.23$, $p < .01$)。また、群別に対応のある t 検定を行った結果、実験群には有意差がみられた (Pre vs Post 2 : $t = 2.56$, $df = 47$, $p < .05$) が、対照群では変化がみられなかった。したがって、キャンパーと非キャンパーとでは Locus of Control の認知に違いがみられ、日常生活時においてキャンパーの方が Internal 傾向に認知しており、しかもキャンプ経験によってより Internal 方向へと変容した。しかし、非キャンパーの Locus of Control に変化はなかった。

実験群のキャンパーについて、Locus of Control の変化の推移をみるために、Pre, Post 1, Post 2 の LOCC 得点の平均を t 検定で比較した。その結果、表2に示すように、Pre を基準に比較してみると、Pre vs Post 1 と Pre vs Post 2 では有意差がみられた (Pre vs Post 1 : $t = 2.66$, $df = 47$, $p < .05$, Pre vs Post 2 : $t = 2.56$, $df = 47$, $p < .05$) が、Post 1 vs Post 2 に有意差はみられなかった。したがって、キャンプ直後に実験群の Locus of Control は Internal 方向へ変容し、キャンプ1ヶ月後まで持続していた。

LOCC 得点の変容が、キャンパー全体にみられるのか、それとも特定の傾向をもつものだけに限られるのかをみるために、日常生活時である Pre の LOCC 得点の高いものから3分の1を Internal 群、低いものから3分の1を External 群として t 検定で比較した結果、表2のようになった。Internal 群は Pre, Post 1, Post 2 とほとんど LOCC 得点に変化はないが、External 群は Pre vs Post 1, Pre vs Post 2 にそれぞれ有意差がある (Pre vs Post 1 : $t = 2.98$, $df = 15$, $p < .01$, Pre vs Post 2 : $t = 4.18$, $df = 15$, $p < .01$)。しかし Internal 群と External 群の間には各測定段

表2 LOCC 得点の比較

群	N	Pre		Post1		Post2		t1	t2
		M	SD	M	SD	M	SD		
実験群	48	45.23	7.22	48.15	8.90	47.94	7.74	2.66*	2.56*
対照群	42	41.71	7.98	—	—	42.64	7.77	—	1.04
		t=2.19*				t=3.23**			
Internal群	16	53.31	3.05	53.38	6.97	52.63	6.47	.03	.38
External群	16	37.19	3.25	42.25	7.94	43.88	8.08	2.98**	4.18**
		t=14.47***		t=4.21***		t=3.38**			

t1:Pre vs. Post1 t2:Pre vs. Post2 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

階で有意差がみられる。したがって、External 群はキャンプ経験により Internal 方向へと変容し、1ヶ月後まで持続しているが、変化のない Internal 群と同質になるまでは変容していない。

以上の結果で明らかになったのは、日常生活時において、キャンパーは非キャンパーよりも Locus of Control を Internal 傾向に認知しており、キャンプ経験により一層 Internal 方向へ変容し、1ヶ月後まで持続していた。特に、キャンプ前に External 傾向に認知しているキャンパーは、キャンプ経験により Internal 方向へ顕著な変容をみせた。

キャンプ1ヶ月前の日常生活時に、キャンパーの方が非キャンパーよりも Internal 傾向に認知していたのは、このキャンプへの参加は自主的なものであり、キャンプ参加だけでなく他の行動に対しても積極的な姿勢を示しているためと考えられる。

キャンプ経験により Internal 方向へ変容したという先行研究として、Williams¹⁹⁾ は協同体験、他者との競争がないこと、そして自分自身と挑戦との葛藤経験を挙げている。Wright²⁰⁾ は成功体験と自分の能力を知ったことを、また Luckner¹⁰⁾ は挑戦することで望ましい結果を得たことが自分のコンピテンスを証明し、他の状況へも般化したことを要因として挙げている。また橘¹⁶⁾ は自我肯定的な自我関与が要因であるとしている。量的に強く大きいストレスを与えて克服したかどうかではなく、克服の過程や結果にどれだけ自我が関わっ

たかという質的なものを要因としている。本研究でも、仲間づくりゲームや1泊2日の登山などを取り入れたキャンプという非日常生活の中での協同体験やプログラムを成功裏に遂行していく中で自分の能力を改めて認識し、高い達成感を得たことが Internal への変容に影響したと考えられる。

キャンパーの中でも特に External 傾向に認知しているものが顕著に Internal 方向へ変容したことは、橘¹⁶⁾ と同じ結果である。したがって、日常生活時における Locus of Control の認知程度により、キャンプの効果が予測できると考えられる。しかし対象が女子大生と児童というように異なるため、より厳密な検討の必要性がある。

2. Locus of Control と一般性自己効力の関係

Locus of Control と一般性自己効力の関係をみるために、LOCC 得点と GSESC 得点の相関係数を求めたところ、有意であった ($r = .4262, p < .001$)。各測定段階でも有意な関係がみとめられ (Pre : $r = .5448, p < .001$, Post 1 : $r = .3837, p < .01$, Post 2 : $r = .3992, p < .01$)、また Pre の LOCC 得点は Post 1 と Post 2 の GSESC 得点とも高い相関があった (Post 1 : $r = .5570, p < .001$, Post 2 : $r = .5769, p < .001$)。

次に GSESC 得点を Pre の LOCC 得点により Internal 群と External 群に分けて各測定段階で比較した結果が表3である。t 検定で比較すると、全ての測定段階で Internal 群の方が External 群より GSESC 得点有意に高い。3つの因子別に

表3 Internal群とExternal群のGSESC得点の比較

因子	群	Pre		Post1		Post2		t1	t2
		M	SD	M	SD	M	SD		
G S E S C	Internal群	52.81	7.71	57.44	9.02	57.88	8.58	2.47**	3.87**
	External群	42.19	9.04	46.13	9.07	45.81	9.18	2.34*	2.64*
		t=3.58***		t=3.54***		t=3.84***			
失敗に対する不安	Internal群	15.75	4.52	19.63	3.42	19.56	3.52	3.75**	4.33***
	External群	12.31	4.51	14.13	5.19	14.13	4.05	1.49	2.44*
		t=2.15*		t=3.54***		t=4.05***			
行動の積極性	Internal群	23.56	4.50	23.81	4.65	23.56	4.10	.23	.00
	External群	17.86	4.33	19.56	4.31	19.31	4.38	2.43*	1.74
		t=3.64***		t=2.68*		t=2.83**			
能力の社会的位置づけ	Internal群	13.50	3.83	14.00	3.14	14.75	3.32	.50	1.51
	External群	12.00	2.81	12.44	3.76	12.38	3.69	.77	.68
		t=1.26		t=1.28		t=1.92+			

両群ともN=16 t1:Pre vs. Post1 t2:Pre vs. Post2 +p<.10 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

両群を比較してみると、「失敗に対する不安」と「行動の積極性」の2因子でも、全ての測定段階でInternal群の方が有意に高い。また「能力の社会的位置づけ」因子では、Post 2でInternal群の方が有意差傾向で高かった。したがって、Locus of ControlをInternal傾向に認知するものは、External傾向に認知するものよりも一般性自己効力を高く認知しており、特に「失敗に対する不安」と「行動の積極性」の両因子について違いがみられた。

さらに日常生活時におけるLocus of Controlの認知程度がキャンプ経験を通して一般性自己効力に及ぼす影響をみるために、群別に対応のあるt検定でPre vs Post 1とPre vs Post 2のGSESC得点を比較すると(表3)、両群とも有意に向上している。また因子別得点をみても、Internal群はPost 1とPost 2で「失敗に対する不安」因子が有意に向上しており(Pre vs Post 1: $t = 3.75$, $df = 15$, $p < .01$, Pre vs Post 2: $t = 4.33$, $df = 15$, $p < .001$), External群では「行

動の積極性」因子がPost 1 (Pre vs Post 1: $t = 2.43$, $df = 15$, $p < .05$)で、「失敗に対する不安」因子がPost 2(Pre vs Post 2: $t = 2.44$, $df = 15$, $p < .05$)で有意に向上していた。したがって、Internal群とExternal群ともにキャンプ経験によって一般性自己効力が向上し、キャンプ1ヶ月後まで維持されていた。特にInternal群では「失敗に対する不安」因子に変容があり、External群ではキャンプ直後に「行動の積極性」因子が、キャンプ1ヶ月後では「失敗に対する不安」因子に効果がみられた。

以上の結果で明らかになったのは、LOCC得点とGSESC得点は高い相関があること、Locus of ControlをInternal傾向に認知するものは、External傾向に認知するものよりも一般性自己効力を高く認知すること、特に「失敗に対する不安」因子と「行動の積極性」因子を高く認知することである。またキャンプ経験によりInternal傾向に認知するものには「失敗に対する不安」因子に、External傾向に認知するものには「行動の積極

性」因子と「失敗に対する不安」因子に効果がみられたことである。

Locus of Control と自己効力との関係について、測定する水準が同じである場合は、ある程度相関があると考えられている¹⁷⁾。本研究では、両尺度とも一般的水準である Locus of Control と自己効力を測定したため、これを支持する結果となったと考えられる。また、Pre における LOCC 得点が全ての測定段階の GSESC 得点と高い相関があることから、キャンプ前の Locus of Control の認知程度により、キャンプ経験の一般性自己効力に及ぼす影響を予測できることを示唆している。

本研究で一般性自己効力の「失敗に対する不安」と「行動の積極性」の両因子で Internal 群と External 群の間に全ての測定段階で有意差が生じている。これは Internal 傾向に認知するものの特徴として達成動機とやる気¹¹⁾に関係があること、成功動機が高く特性不安と状態不安が低いこと⁸⁾、反対に External 傾向に認知するものの特徴として無気力、無力感に関係していること⁵⁾を裏づけている。また「能力の社会的位置づけ」因子に関しては、容易に変化するものではなく、今までの生活である程度固定しているものと考えられる。

Internal 傾向に認知しているものは「失敗に対する不安」も少なく、キャンプで「行動の積極性」を実行し、努力を惜しまず多くの高い成功体験を獲得し、「失敗に対する不安」が減少し、つまり自信につながったと推測される。また External 傾向に認知するものは、キャンプ経験により Locus of Control が Internal 方向へ変容し、一般性自己効力の「失敗に対する不安」と「行動の積極性」の両因子に効果があった。この両因子はキャンプ前に Internal 傾向に認知するものと有意差があった因子でもある。したがって Internal 方向への変容と一般性自己効力の両因子は関係していると予想される。External 傾向に認知しているものはキャンプ経験により、顕著に Internal 方向へ変容するとともにまずキャンプ期間中に「行動の積極性」を獲得し、日常生活に戻ってから「失敗に対する不安」も減少したと考えられる。

結 論

本研究の目的は、キャンプ経験が参加児童の Locus of Control に及ぼす影響と、さらに Locus

of Control と一般性自己効力の関係を明らかにすることであった。

小学校5・6年生48名を対象に、1泊2日の登山をメインプログラムとする7日間のキャンプを実施した。児童用一般的 LOC 尺度と児童用一般性セルフ・エフィカシー尺度を用いて分析した結果、次の結論を得た。

- 1) キャンプ経験は参加児童の Locus of Control を Internal 方向へ変容する効果があり、特に External 傾向に認知していた児童に顕著な効果があった。
- 2) Locus of Control と一般性自己効力には高い相関がある。
- 3) Locus of Control を Internal 傾向に認知しているものは、一般性自己効力を高く認知しており、特に「失敗に対する不安」と「行動の積極性」の両因子を高く認知していた。

今後の課題として、1) Locus of Control や一般性自己効力と他の変数(自己概念、特性・状態不安など)との関連、2) キャンプ経験による Locus of Control と一般性自己効力の向上と日常生活場面における行動の変容、3) 発達段階別による比較について研究を進める必要がある。

引用文献

- 1) Bandura A, (1977) : Self-Efficacy ; Toward Unifying Theory of Behavioral Change, *Psychological Review*, 84 (2), 191-215.
- 2) バンデュラ A. : 自己効力(セルフ・エフィカシー)の探求. (訳) 重久 剛, (編) 祐宗 省三他. 「社会的学習理論の新展開」, 金子書房, 東京, pp. 103-141.
- 3) Bandura A, Adams NE, and Beyer J (1977) : Cognitive Process Mediating Behavior Change. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 125-139.
- 4) Harmon P and Templin G (1987) : Conceptualizing Experiential Education. (EDS.) Meier J, Morash T and Welton G, (In) *High Adventure Outdoor Pursuits*, 2nd Edition, Horizons, Columbus, Ohio, pp. 69-77.
- 5) 波多野 誼余夫・稲垣佳世子 (1981) : 無気力の心理学. 中央公論社, 東京.
- 6) 飯田 稔・関根章文 (1991) : キャンプ経験

- が児童の一般性自己効力に及ぼす効果. 筑波大学体育科学系紀要 15:93-102.
- 7) 井村 仁 (1987) : 冒険プログラムが自己の発達に及ぼす効果に関する文献的研究. レクリエーション研究, 17, 21-28.
 - 8) 次郎丸睦子・五十嵐一枝 (1982) : 児童における Internal-External Control とその学習動機および不安との関係. 日本教育心理学会第24回大会発表論文集, 398-399.
 - 9) 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 (1982) : Locus of Control 尺度の作成と, 信頼性, 妥当性の検討. 教育心理学研究, 30, 302-307.
 - 10) Luckner JL (1985): Outdoor-Adventure Education and the Hearing Impaired ; An Investigation of the Effects of Self-Concept and Locus of Control. Doctoral Dissertation, University of Northern Colorado.
 - 11) 宮本美沙子 (1981) : やる気の心理学. 創元社, 東京.
 - 12) Nowicki S and Barnes J (1973) : Effects of a Structured Camp Experience on Locus of Control Orientation. The Journal of Genetic Psychology, 122, 247-252.
 - 13) Rotter JB (1966) : Generalized Expectancies for Internal vs External Control of Reinforcement. Psychological Monographs, 80 (Whole No. 609), 1-28.
 - 14) 坂野雄二・東條光彦 (1986) : 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み. 行動療法研究, 12 (1), 73-82.
 - 15) Saltzer EB (1982) : The Relationship of Personal Efficacy Beliefs to Behaviour. British Journal of Social Psychology, 21, 213-221.
 - 16) 橘 直隆 (1989) : 冒険キャンプ経験が女子大学生の Locus of Control に及ぼす影響. 筑波大学体育センター大学体育研究, 11, 63-70.
 - 17) 竹網誠一郎・鎌原雅彦・沢崎俊之 (1988) : 自己効力に関する研究の動向と問題. 教育心理学研究, 36 (2), 172-184.
 - 18) Van der Smissen B (1975) : The Dynamics of Research. (Eds.) Van der Smissen B, (In) Research Camping and Environmental Education, The Pennsylvania State University, pp. 5-17.
 - 19) Williams TE (1984) : The Effects of a Brief Adjunctive Physical Challenge Wilderness Program on Locus of Control in Adolescent Substance Abusers. Doctoral Dissertation, Oklahoma State University.
 - 20) Wright AN (1982) : Therapeutic Potential of Outward Bound Process ; An Evaluation of a Treatment Program for Juvenile Delinquents. Doctoral Dissertation, The Pennsylvania State University.